

Aono Canata no For Answer

一織

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アナトリアの傭兵はジョシユアのアナトリア襲撃以後幸せな余生をフィオナと過ごした。そして息を引き取り、ひっそりと彼の人生は終わる筈だった、お節介焼きな神が彼の前に現れるまでは…

『貴方にはもっと幸せを知ってもらいたい。そして…貴方達が望んだ世界で暮らして欲しい。』

これは…戦いの中でしか生きられなかった彼が、フィオナと出会い、変わったことを振り返りながら、前へ進む物語

## 目次

前日談 リンクス戦争の英雄の最期	1
彼はそして日常を得る	5
彼とFCの出会い	9
For what do I fly?	18
“イレギュラー”と“最強” くお肉好きを添えてく	22
気になる人、惹かれる人	27
過去の決別、そして自覚	33
なんでか弟子入り	40
そして出す入部届	43

## 前日談 リンクス戦争の英雄の最期

『遅かったな、言葉は不要か』

またあの時の思い出、もう何度目か解らないくらい同じ夢を見る。

ジョシユアがホワイトグリントではなく、アレサを駆けアナトリアを襲撃してくる、そして私はホワイトグリントにMOONLIGHTを装備し、ジョシユアの駆けるアレサを斬り裂く…

「っはあ…はあ…」

その瞬間の夢だ。

何度も何度も夢に出てくる。ジョシユアの表情はどこか悟ったような顔で…

「大丈夫？…貴方？…」

私を気遣って声を掛けてくれる私のフィオナ…ああ…私はフィオナの笑顔の為に戦っていたんだと改めて実感できる。

私はフィオナの頭に手を乗せ、大丈夫。素晴らしい撫でる。

フィオナは少しくすぐったそうにしながら、私に身を預けて来る。

私はそのままフィオナを抱きしめる。

「どうしたの??」

「……また、あの時の夢を見た。もう私には戦う必要は無いと言うのに……」

そう言うとフィオナは少し申し訳無さそうな表情になる。

そんな悲しい目はして欲しくない……私は思わずフィオナの身体に手を伸ばした。

---

私はフィオナと余生を過ごした。とても幸せな時間だった。5分に1度愛を囁く様な、そんな甘い日々。

私はフィオナを残して先に逝かねばならないようだ。ACに乗り、AMSによる負荷とコジマの影響を受けたリンクスにしてはだいぶ長生きした方だ。

ああ……フィオナ……私の最期を君に直接看取って貰えるなんて夢にも思わなかった。

なんて私は………

幸せなのだろう…

---

『本当に?』

『ああ、幸せだったとも、傭兵として生き、戦いの中でしか生きられなかった私に、愛を…全てをくれたフィオナと共に過ごした時間はとても幸せだった。』

『そう、でもまだダメ、貴方はもう少し幸せを知らなきゃ。』

3

『さつきから思っていたがお前は? 一体なんなんだ? 私はまだ死んでいないのか?』

『いいえ、確かに貴方は天寿を全うしました。でも貴方の半生は凄惨なものでした。貴方にはこれからそれを取り戻してもらいます。』

『どういうことだ?』

『貴方にはこれから違う世界に行ってもらいます。貴方とフィオナ、そして…ジョシユアが望んだ平和な世界へ』

『待て、それならフィオナとジョシユアも共に……っ！』

『残念ですがそれはできません……申し訳無いです……それに、フィオナはまだこの世界に生きています、そして……ジョシユアの魂は既に違う世界に転生しました。安心して下さい。』

『そ、そうか……なら仕方ない……』

『では、これから転生させますが、何か転生先で残してほしいものがありますか？』

『そうだな………この世界でのフィオナとジョシユアとの思い出を残して欲しい』

『ふふっ……ははは！それはなんとも！気に入りました！特別にこの世界での思い出を全部持っていかせます！大サービスですよ！それと……1つ私から“向こうの世界に合った贈り物”をあげます。それでは、行ってらっしゃい。リンクス戦争の英雄様。貴方に良い出会いがあります様に』

彼はそして日常を得る

(……………うう、眩しい……)

(これが……………本当に世界なのか……)

アナトリアの傭兵は目を開けて驚愕する。そこは荒廃した地上ではなく、文明が栄え、争いの起きない平和な世界

(なんて……………綺麗なんだろう……)

彼の目に一条の涙が伝う。

これが自分達が命を賭してまで望んだ世界

もうとうに枯れ果ててしまったと思っていた涙がこんなにも簡単に流れた、否、ACを駆けていた頃はフィオナにもきつと見せなかつただろう

『おはようございます。これが、貴方達が望んだ世界、平和な、清浄な世界』

(ああ、綺麗だ、空も何もかも……この景色をフィオナとジョシユアにも見せてやりたかった。)

『貴方に、これを授けます。それはきつと貴方の翼になります。』

そう言い、神は真っ白に綺麗な薄緑色のラインが入った機械的な靴



を渡す

(変わった形の靴だな……)

『この世界で、人が空を飛ぶために作った道具……アンチグラヴィトンシューズ……人呼んでグラシユです』

(……これが、言っていた贈り物か?)

『ええ、それは好きになさってください。名前も自由につけてください。』

彼は真つ白な見た目に薄緑色のラインが入ったグラシユを見て、彼の機体を思い出した。

“White Glint”

起動キーはこの世界を見せたいと願う 「ファイオナの名前」にする。

「行こう、ファイオナ」

彼はそう言い、グラシユを起動し、空を飛ぶ

「なんて……綺麗な空だ……」

彼は感動した……美しくどこまでも青い空

この空を自由に飛べたら……

その日、リンクス戦争の英雄は運命に出逢う

---

彼が飛ぶ姿が “白い閃光” と呼ばれるようになるのに時間は掛からなかった。

彼の名前と戸籍は神が用意してくれた。

(今日から学園なる場所に通うらしいが…移動手段はグラシユ許可なのが助かる)

彼は自分のグラシユを起動させる。

「ファイオナ」

彼はWhite Glinntを起動し、

学園まで綺麗なコントレイルを出し、飛んでいく。

(まさか私が学問を学ぶ学生になるとはな)

思い返せば、彼は伝説的な腕のノーマル乗りで国家解体戦争にも参加し、戦場でしか生きられなかった彼は既に学生の歳でACに乗っていた

(…私はACに乗り始めた頃だったかな、今この世界で学生と呼ば

れる年齢は)

(久奈浜学院と言う場所か……いい場所だな……)

転入手続きを済ませ、2年からのスタートだ、周りに友人を作る気は起こらないが、まあ、適当に馴染めるだろう

「わたし……俺は今日から転入する事になった、ミナセ・イエルネフェルトだ、よろしく頼む。ハーフだが、日本語は普通に話せる。趣味は……空を飛ぶ事だ」

## 彼とFCの出会い

「ねえねえ、イエルネフェルトくん、スポーツとかやってたの？」

「いや、スポーツはこれといって…」

「えー!!陸上とかやってそうー!」

「あまり興味が無かったからな…」

助けてくれジョシユア、なぜこんなにも女子が寄ってくる…私は平和に過ごしたいし、私はフィオナ以外の女性と接するのに抵抗があるんだ…

きっとジョシユアならうまく返すのだろうが私はあまり日常会話が得意ではない…

と言うか、フィオナと居た時は彼女に対する愛おしさしかなかったが、ほかの女性となるとどう接していいかわからん…

「あ、あのー!」

「なんだ？」

「空を飛ぶのが趣味って言ってたんですけど、それってFCですか？」

「AC……!?!」

「いえ、『えーしー』じゃなくて『えふしー』です…」

「あ、ああ……すまない聞き間違いだ、だがその『えふしー?』とは一体なんだ」

「フライングサーカスの略称です、グラシユを使ったスポーツなんですよ」

「ほう、それは興味があるな………放課後にでもどう言ったものか教えて欲しい、名は?」

「私は倉科くらしな明日香あすかです。イエルネフェルトさん」

「では放課後にでも聞きに行こう。次の授業がそろそろだ、席に戻った方が良いのでは」

「あつ、はい!」

「あつそうだ!戻らなきや!」

「はい、ではまた放課後に」

グラシユを使ってするスポーツか……私とWhite Glin  
tはどの程度できるだろうか……楽しみだ……

ようやく放課後になったか……グラシユを使った競技とは興味深い  
……早く倉科の元に行かねば

「あ、イエルネフェルトさん！来てくれたんですね」

「ああ、待たせてしまったか？」

私は倉科にそう訪ね謝罪しようとするが、倉科はそれを止める  
「いえいえ、そんな事はありませんから！」

「むしろ来てくれて有難いです。」

「そうなのか？俺は倉科さんからグラシユを使うスポーツと聞いて居  
てもたつてもいられなくてな」

私はかなり食い気味に話をしていた。そう、この世界の綺麗な空を  
飛ぶ、それだけでも楽しいというのに、そのグラシユを平和に活用し  
ているスポーツがあるという事に憧れと言うのだろうか？きっと楽  
しいのだろうと思いを馳せていた

「あ、明日香先輩……と……隣の方は……？」

「む、初めまして、俺は2年に転入してきた、ミナセ・イエルネフェルトだ」

「は、初めまして……一年の有坂真白ありさかましろです。」

「それで、ええと……イエルネフェルト先輩と明日香先輩は一体どういった経緯で？」

一年だと恐らくは後輩であろう有坂が質問をしてくるので私が答える

「ああ、FCとやらが気になってしまつて倉科さんに頼んだら見せてくれると言うので来たのだが……女子用の競技だったかな……？」

「いや！そんな事はないぞ!!」

「む、貴方は……？」

「俺はFC部の部長青柳紫苑あおやぎしおんだ」

「青柳先輩ですね。俺はミナセ・イエルネフェルトと言います。」

「ミナセ君か、いい名前だ!!そして中々に筋肉だな!」

中々に筋肉とは一体なんだろうか……私は“あの頃”の姿よりは

若い……大体「レイヴン」として生きていた頃くらいの見ただろうかその頃は傭兵だったので鍛えていたから筋肉はついている方だ  
と思うが……

「FC部の部長と言うことは、男女共にある部活なんですね、俺はFC  
がどんなものか気になって、見させて欲しいと倉科さんに頼んだん  
です。」

「ほう！FCに興味が!!気に入って入部してくれたら嬉しいんだが  
!!」

「なんだか妙に力説してくる先輩だな……まあ良いか、少なくとも女  
子よりは話しやすい……」

「部長、一体どうしたんですか？もしかして無理矢理勧誘とか？」

そんな声がしたので私は誤解を解くように先に口を開く

「いえ、違いますよ、むしろ入部したい位ですよ。」

私がそう言うと、そういった男……恐らくは同い年の生徒はそれは  
悪かったです部長と、青柳先輩に誤り

私に自己紹介をしてくる

「俺はFC部の部員兼コーチの日向昌也ひなたまさやです、確か転入生の」

「ああ、噂になっているらしい……ミナセ・イエルネフェルトだ」

「早速で悪いんだがFCがどんなものか見たいのだが……」



「お、噂の転入生さんがFC部にきているとわねー！」

「む、貴女は確か…」

私が振り向くと、黒髪で腰のあたりまで髪を伸ばした女子がいた。

「同じクラスの鳶沢みさきだよ、よろしく〜」

「あ、ごめんなさい！委員会がちよつと長引いて…あ、イエルネフェルトさんこんにちは。」

「えーつと確か同じクラスの委員長の…」

「青柳窓果だよ、どうしたんですか？まさかうちのお兄ちゃんが……」

同じ苗字と言うからにはと思っていたがどうやら正解のようだ。

「ああ、部長さんの妹か…」

「あ、はい。と言うことはFC部に…？」

私は9割入部を決めていたので頷く

「ああ、興味があつて見学をさせて欲しいと倉科さんに頼んだ。青柳さんも選手を？」

私がそう聞くと、彼女は首を横にふり、

「私は部員なんですけど、マネージャーなんです。」

と否定された。

「じゃあ…基本的なFCのルールを説明した後に実際に見てもらった方が良さそうなんで、ルールの説明と、用語の説明を」

「有難い。」

私はFCの歴史とルール、用語について学ぶ。

タイプが三つに別れており、

スピダー

高速飛行でブイタッチによる得点を狙う、初速が遅く、最高速度が高い

ファイター

ドッグファイトによって相手の背中にタッチすることで得点することを狙う、加速を抑え、最高速を犠牲にする代わりに初速を上げている。

オールラウンダー

「スピダー」対しては「ファイター」の様に、ドッグファイトでの得点を狙い、「ファイター」に対しては「スピダー」の様に、スピード勝負でブイタッチを狙うといったように、相手によって柔軟にプレイスタイルを変化させることが出来る。

そしてどうやら日向の役割は「セコンド」と言うらしい。

ヘッドセットを用いて地上で選手に指示を出す役割。初期の頃の

FCで相手の姿を見失い、一方的な試合となってしまう事態が多発したため、導入された制度だとか。

なんだか、オペレーターの役割のように感じてしまう。

ファイターもスピイダーもオールラウンダーも捨て難いが、私は“White Glint”を使ったかった。

日向に教わった事だが、一般的なグラシユは普通の靴と同じ見た目をしているらしい。私のWhite Glintは特徴的な形なので恐らくは競技用だろうと思う。

「さて、日向さん、このグラシユはどのタイプだ？」

私は自分の“White Glint”を日向に見せる

「うーん……これは……っ!!」

私のグラシユのデータを見た瞬間に驚愕の顔を浮かべる

「こんなのを使って飛んでいたのか?! ミナセ君は!」

「どうしたんですか? コーチ?」

「このグラシユ…バランサーカットしてあるグラシユの状態だぞ」

「ふむ…バランサーってなんだ?」

私がそう言うと、FC部全員がずっこけた。

「いやいや！イエルネフェルトくん凄すぎますよ!!」

倉科はキラキラした目で私を見つめながらそう行ってくる。

「幾ら何でもおかしいって気付こうよ…」

呆れた目で見てくる鳶沢と

「バランスーを入れ忘れて飛んだら私くるくる回るだけですよ!？」

「まさかそんな状態のグラシユで飛んでいたなんて…」

驚愕する有坂と日向

私は一体なにか特別なことをしていたのだろうか？

「良いか？バランスーを入れないで飛ぶというのは普通の人、一般的なスカイウォーカーには不可能なんだ、バランスーカットは調整をする時に『グラシユを出荷状態に戻す』という作業の一つで、バランスーを入れないで履くと真白みたいな事になる。」

ふむ……

だが私の出した答えはこうだ

「これで飛べてるんだ。これを使ってやってみる。」

私はまだ知らない。

私自身が『彼の機体と同じ異名』を持つ事を

For what do I fly?

みさきは困惑していた。ありえない。おかしい。こんな事があるなんて。

「どうした鳶沢、迷いが見えるぞ」

「——っ!？」

次の瞬間、背後から衝撃が襲い、体勢を派手に崩す。

その理由は至極当然のように背後からタッチされたからだが、みさきは本気で飛んでいた。

(なんで!?!どうして本気の私が数分前に始めたばかりのイエルネフェルトくんにごここまで追い詰められてるの!?!)

「コーチ、みさきちちゃん、本気で飛んでますよね!?!なんでイエルネフェルトさんにあそこまで……?コーチ?」

「そんな……この短時間で“アンジェリック・ヘイロー”を……?」

「アンジェリック・ヘイロー……?」

「アンジェリック・ヘイローは、相手の周りを円を描いて高速で回転し続けることで、相手をタイムアップまで閉じ込めることで勝利することを目的とした技だ。

体力の消費が激しく使用できる時間が限られる上に自分がリードしている状況で無ければ使用する意味がない。

原理は、手元のメンブレンコントロールのみで加速し続けると、すぐに円を描いて回転し続けてしまうだろう?だから加速技としては成立しないが、その性質を逆手にとって考案されたのがこの技だ。そ

して、一度決まると抜け出すことはほぼ不可能だ」

「そんな高度な技術の技をイエルネフェルトさんは…」

「まだFCを初めて30分と経っていないのに出来ている…これは未  
恐ろしいな…」

「……悪いが俺の勝ちだな、鳶沢」

「—っ……そうだね」

「まあ、初めてやってみたが、あの技は実戦であまり使わない方が  
良いか」

「———どういうつもり？」

みさきは少し怒った口調でミナセに言う

「あれは疲れる、それに自分優位でなければ使う意味が無い、それ  
に———」

「あれは人の心を折る」

「———」

「俺がされたら心が折れるさ、抜け出す術を見つけれない内は——  
な」

そう言うと、ミナセは地上に向かい背を向けて去る

みさきは呆然とそれを見るしか出来なかった。

みさきが呆然と見ていたミナセの背中

何故かとても小さく、寂しそうに見えた。

---

『その力で貴様は何を守る？——』

『終わりか——あるいは貴様も』

“あの頃”は守るべきモノがあり、守るべき“人”が居て…

強くなれば、強くあればそれでよかった

でも今は、

今この時、この世界では

自分のこの力が憎かった。

---

(私は……なんの為にFCをしたかったのだろうか…？強くあれば？強くなりたかった？どちらも違う。“この世界”で力は必要無い。相手を負かすことに、なんの感情も無かった訳では無かった、でも“あの頃”は相手を負かせば、そうすることが、自分の、“彼女”の、世界の為になったから)

「私は……なんの為に空を飛ぶ……？」



「イレギュラー」と「最強」　　くお肉好きを添えて

「ふむ、それで私の所に……か良いだろう、イエルネフェルト、ちよつと付き合え」

「各務教諭……？」

私が困惑するのをよそに、各務教諭にあれよあれよと校庭まで連れ出される

「話は昌也から聞いている、掛かってくるがいい。」

そう言い各務教諭はグラシユを起動させ、飛ぶ。

「本気は出さん……ああ、きつとな」

そう言いニヤリとする

「そらあ!!」

「ぐうつつ!!」

各務教諭とのFCは接戦を極めた

「そこ!!」

「これ程か、見事…!!」

空に金色に近い色のコントレイルと、薄緑色のコントレイルが残る  
(これ程までに接戦なのはいつぶりか……だが私は悲しいよ、イエ  
ルネフェルト……それ程の強さで……私と同じ道を歩むか?)

「っはあ……っはあ…!!」

「時間だな……」

「俺の負け……ですね、ありがとうございます、各務教諭、また、やりま  
しょう」

「まあ、待てイエルネフェルト、少し話をしようじゃないか」

「私もな、お前と同じ様な経験があるからお前に戦いを挑んだ。だが  
確信したよ。お前なら大丈夫だイエルネフェルトお前はまだ飛べ  
る。」

「各務教諭……」

「お前の過去の事は聞かんよ、何か『特殊な』事でも抱えているのだ  
ろうっ。」

「何故、そう思うんですか？」

「普通に考えれば解るさ、平凡な生活を送った生徒の口から『なんの為に飛ぶか』など出ると思うか？」

「何か特殊な事情でもあるのだろうか、それこそ『命のやりの先に平和を手にした戦士』の様な…な」

「……………」

「世迷言だったな、忘れてくれ。だが——」

「お前とのFCは私が今までした中で一番楽しく飛べた。それだけは忘れないで欲しい」

そう言い、微笑んだ姿は何処か『彼女』に似ていた

その日私は各務教諭に夕食を奢られてしまった。なんだか悪い気がしたので自分も出すと行ったのだが

『生徒に金を出させる教師が居るものか』

と言われあれよあれよと出されてしまったのである。

今は一人で暮らしている部屋に帰り、シャワーを浴びたので着替えていた。

すると、突然チャイムの音がするので、出る事にした

「この時間に何かの勧誘か？」

宗教勧誘とかが偶に来るのだが、私がこう言うと大体帰ってくれるのでその点は助かるのだが

「じいじいめんない!!」

目の前にいたのは見知らぬ少女……

さてどうしたものか

「すまなかった、怖がらせてしまったようだな。」

「い、いえちよつと驚いただけですので……」

なんだかんだして結局私の家が上がってきた。警戒心を持ってほしいものだが……平和なここでは仕方ないのか？

「で、何か用だったのか？」

「実はですね、昨日からここに越してきました、その挨拶と……晩御飯の角煮を少し多く作ってしまったのでお裾分けに……」

とてつもなく優しい少女だな……

「成程、そう言うことならば、お言葉に甘えよう。ああ……そう言えば名乗っていなかったな、俺はミナセ・イエルネフェルトだ、久奈浜学院に通う2年だ」

「すいません、私も名乗っていませんでした、私は市ノ瀬莉佳です。高藤学園福留島分校の1年です」

年下か同年代だとは思っていたが……まさか一つ下だとは思って  
いなかったな……

「所で、ミナセさんは部活は……」

「まだ部活には入っていない……まあ入る予定はある。」

「あれ？2年なのに……ですか」

「ああ……実は俺も此処に来たばかりでな、色々とあって」

「そうだったんですね。すいません。」

何も謝る事では無い。と言ひ私はそろそろいつもの鍛錬をして寝ようと思っていたので、市ノ瀬を帰す。

「すぐ隣だが気を付けてな、ああ、容器は洗って返す。」

「分かりました。おやすみなさい。」

「ああ。」

---

その日、私は久しぶりに良い夢を見た。どんな内容だったかは良く覚えてはいないが、何処か幸せな時間を過ごしている。何でもない日々が幸せなだと思う、そんな夢だった。

気になる人、惹かれる人

朝4:00、スツキリと目が覚める、むしろ何処か心地よいレベルに目が覚める。

私は軽く空を飛ばうと思い、グラシユを起動する

朝の澄み渡った空気の中、空から見る景色はいつも美しいが、その日は普段よりも綺麗に見えた。

そこから大体30分位してから、地上に戻り、昨日貰った角煮をタッパーから鍋に移し替え、洗う。

そういえば今日返すとは約束したものの、何時頃が良いかは聞きそびれたな。まあ、学園の都合上7時が妥当か

私はそう思い、隣の市ノ瀬の部屋を訪れた。

「はいい……どちら様で……ってミナセさん!!早かったですね」

市ノ瀬に届けに行くとき少々驚いた表情をされる

「ん?ああ……すまない、来るのが早かったか?」

「いえ、そうではなく……」

「ん?ああ……タッパーだけ持っているのは悪いと思って鍋に移し替えただが?」

私がそう言うと市ノ瀬はほっとしたような複雑な顔を浮かべる

「そ、そうですよね……あはは……」

「すまないな、昨夜実は夕食はすでに取ったあとだったんだ、朝食に頂いたよ」

そう言うと花が咲いたようにぱあつと笑顔を浮かべる。

「初めて食べたが、大変美味しかった。また食べてみたい位だったよ。」

私はそう言うと、学園へ行こうと立ち去る。

が、市ノ瀬がどういう訳か固まったまま動かない。

「おい、どうした?」

私が声を掛けるとハツとしたように、家の中にバタバタと戻り、バッグを抱え出てくる。

「い、いえ、大丈夫です……大丈夫……」

明らかに息が乱れていて、準備を急いでした様に見えるが……まあ良いか、恐らく週番かなにかだと気づいて慌てたのだろう。

そう思い、私は歩き出す。

意外かもしれないが、私は普通に歩いて学園へ行くのも好きだ。

空から見える景色とは違い、人が生活しているのが身近に感じて好きなのだ。

争うこと無く、平和に笑顔を浮かべている人達を見るだけでも幸せな気分になれる。

「……………い」

「……………フェルト先輩」

「イエルネフェルト先輩!!」

突然私の事を大声で呼ぶものなので、思わずその方向を睨みつけてしまった

「ぴっ……」

「ん? ああ、すまない……えつと君は……有坂さん……で合ってるかな?」

「は、はい……合ってます……」

どうやら怯えさせてしまった様だ。

「考えごとをしていた所を急に呼ばれて驚いてしまったね。有坂さんは飛んで行かないのかい?」

私がそう言うと、有坂は顔を顰める。

「……嫌味ですか先輩……」

「別段そういった意図は無かったんだが……すまない、思ったことを口に出すのは俺の悪い癖だな。」

「あ、いえ。なんかこつちこそごめんなさい。」

「ただ、イエルネフェルト先輩のアレを見せつけられた後に飛ぶ気は起きなかったです……きつと、先輩みたいな人を天才って言うんでしょうね……」



「……天才とは99%の努力と1%の閃きである。とは有名なトーマス・エジソンの格言だな。」

「はあ……?」

有坂は何が言いたいのかわからないという顔をする。

「つまり、努力をすれば、どんな天才にも追いつける。と言いたいだ。」

「……………」

「天才と呼ばれる人間が最初から才能があったのはほんのひと握りだろう、殆どの天才と呼ばれる人間は努力の結晶だ。」

「イエルネフェルト先輩も……努力したんですか?」

「色んな風に飛んだ。綺麗な景色を眺めたくてね。」

「イエルネフェルト先輩は……どうして飛び始めたんですか?」

ふと、有坂がそんな事を聞いてくる。

「俺は——」

『綺麗な空を少しでも近くで見たかったから』

嘘だ。本当は違う。私は綺麗な景色を、空を、  
“彼女”と“アイツ”と見たかったんだ。

この平和な世界を――

大切な人と謳歌できれば良かったんだ。

――  
そんな事があつた日、私は昼休みに屋上で空を眺めていた。

「ん？イエルネフェルトじゃないか、どうした。辛気臭い顔をして。折角の綺麗な顔が台無しだぞ」

「各務教諭……からかうのはやめてください。」

「はっはっは。割と本気なのだがな、して、どうした？女にでも振られたか？」

「それはそんな人居ないの解って言ってますね？」

「流石にバレるか？」

「心当たり無すぎる事言われりやそうなりますよ」

そう言うと思わずふつと笑みを浮かべる。

「ようやつと笑ったな。私はお前のその顔好きだぞ」

「なんです？急に」

「いや、何故だろうなお前を見ていると年下には思えんよ」

まあ、精神的にはどうか前世から考えれば余裕で歳上だもの。

「ふふ……なんの話をしていたのだったかな」

「なんの話でしたっけ？」

私と各務教諭はそう言い笑いあった。

結局、私は何を悩んでいたのかは綺麗さっぱり忘れていた

## 過去との決別、そして自覚

私は困惑した、死にたがりの馬鹿な……じゃなくて  
何故、私の所に人が集まっているのかだ

「……えと……何か用かな？」

「イエルネフェルトくん！是非陸上部に入らない!？」

「いや、うちの剣道部も……!」

「是非ともテニス部に!!」

なんでさ？

いや、確かに私は今ほどの部活にも所属せずにふらふらとしたり、  
各務教諭と飛んだりしているが……

うーむ……

「まあ……見学だけならば行こう」

今日は特に放課後に用もないから安請け合いしてしまったのだが  
……

陸上部にて

軽く走るだけでいいと言われやったところ

「すっげえ!!イエルネフェルト!!全国レベルの速さだぞ!」

陸上部の恐らく同学年だろうの男子が驚愕していたので

「??そうなのか?よく分からんが、まだ少し余裕を持って走っている」  
素直にそう言った所、顔を引き攣らせ

「え」

そのまま絶句してしまった。

「どうした?何かおかしかったか?」

「イエルネフェルトの中の軽くの定義がおかしいよ; ; ;」

---

剣道部にて

少し素振りをするだけでいいと言われやったのだが……

「ちよつと待て、イエルネフェルト本当に初心者か?」

「そうだが?持ち方が悪かったか?振り方か?取り敢えず悪かった所を指摘してくれると助かる」

「初心者がやる素振りではないのは確実だ」

「??まあ、振れても実際にできるかは分からないからな」

「試しにちよつと1年生と模擬試合してみたら自分の異常さに気づくよ……」

---

「いやあああああ!」

(遅いな…避けるまでもない)

私は振り下ろしのフェイントからの胴打ちを避ける事無く、竹刀で返し、そのまま竹刀を持つている籠手を打ち、体制を崩した所で胴打ち、突きに繋げる

渴いた音が道場に木霊し、相手は竹刀を取り落とす

「そこまで!!両者下がれ」

「イエルネフェルト……お前、本当に未経験者か？」

「?どういう意味だ?初心者だと言っただろう?振りも足さばきも見ていれば解ったと思うが」

私は何が何だかわからずそう返す

「いや、普通フェイントが来ると解ったら避けるか身構える位する筈だろ?」

「ん?避けるまでも無いし身構えるほどでも無いと判断したからあれだったのだがな、だが俺には向いていない。」

「相手に攻撃するのに声を出すのが理解できない」

そう言ってしまった後に気が付いた、自分は人を殺すのになんの躊躇いも、何の感情も無くなっているのだと

……私は殺す事に慣れすぎている…ネクスト乗りになる前から

ずっとレイヴンをしていた。更にその前まで遡ればレイヴンになる為に傭兵をしていたし、その時点で何人殺したかもう思い出せない。

私はこの世界では生きづらい……いや、元々私なんかは戦場で戦い、戦いの中で朽ち果てるべきだったのかもしれない……

その日以降私はあの時の記憶ばかり思い出され、夢にまで見るようになった。

私は勧誘に来る部活の誘いは全て断る様になり、しばらくはグラシユにも触らなくなった。そんな風に擦り切れ2週間程過ごした頃だろうか？

「おい、イエルネフェルトちよつと来い」

放課後、各務教諭に腕を掴まれ、ズルズルと引きずられる

「各務教諭……!?!」

「お前、何があった？前から何事も達観していた様に見えたが、今のお前は達観では無く諦観しているぞ」

各務教諭に呼び出され、屋上までやってくる

「各務教諭……俺は……」

限界だった、もうずっと擦り切れた状態で過ごしてきた、それに慣れていたので……各務教諭に優しくされてしまえば……“自分”の秘密を知ってもつても良いと思えた

「どうしたイエルネフェルト……?」

「……やはり私はこの世界にとって異物なんだろう、私は元々この世界には存在しなかった……私は……戦場で多くの人を殺したんだ……その私が今更こんな風に平和な世界に来ても……世界とはズレて生きていくに違い無い……!!」

「イエルネフェルト……それが私がお前と接して感じて違和感か……」

「成程な……私などには想像もつかない壮絶な生き方をしたんだな……」

「だが私はそれを信じるし、受け止めよう。イエルネフェルト」

「そう言い、各務教諭は私に近づいてきて、私をまるで赤子をあやす様に撫でる」

「かがみ……きょうゆ……?」

「今は好きに呼べ、私はミナセの全てを受け入れよう」

「あ……ああ……ファイオナ……私はファイオナと過ごして知った筈なのに……」

「よしよし……辛かったな、誰にもそんな事は言えなかったのだろう……?……お前のその年齢で私の想像を絶する体験をしたなら尚更だ、今は存分に私に頼れ」

「各務教諭……私は……私は……私の願いは大切な人とこの平和な世界を見る事だったのに……っ!!私だけ幸せになるのが怖くて……」

私は何故か涙が溢れて止まらなかった。

「そうか……お前は優し過ぎるんだ……お前が幸せになるのをお前の大切な人が望まないわけが無いだろうに……」

「各務教諭……」



「ここだけの話……私はお前をかなり気にかけているんだぞ？中途半端な時期にクラスに来て周りから浮かないだろうとか、FC部の件だってそうだアイツに言われたのとは関係無く、お前を気にしていたから私はお前と飛んだんだよ」

私は各務教諭に自分の秘密を明かし、ひとしきり泣いたあと、何故か各務教諭の家に来ていた

「まあ、何も無い所だがくつろいでくれ」

「え、あの……いや」

「ん？なにかまずかったか？お前は一人暮らしと言っていただろう？だから今日は一人で居させてはまずいと思ったのだが？」

各務教諭がイケメンすぎる……私が女だったら惚れてる……いや、そうじゃなく……!!各務教諭が女性だから今現在困っているんだけども!!

「まあ、本当は学園の誰かに見られたらまずいが……その時はその時だ、そもそも学園側にはお前を私の家に連れてくると言っている」

「え……？」

「学園側がお前を心配しないとも思っていたのか？」

「あ……」

そう言われて初めて自分は色々な人に支えられていると気づく

「まあ、そんなとこだ。何なら一緒に風呂に入るか？」

「は、入りません!!」

「まあ、私のようなのと一緒に入りたくは無いか」

そういう意味じゃなく!!各務教諭と一緒に風呂に入ったら鼻から赤いものを噴射して

ーYOU DIEDー

になること待ったなしだよ!?

うう……気付いてしまった……

私は恐らく各務教諭に

恋をしている……

なんでか弟子入り

(まずい……かなりまずい……いや、何がまずいかと言うと私が各務教諭を好いてしまったことが不味い……何故なら今の私はあくまでも1生徒で、各務教諭は担任の先生なのだ、恋することを許される筈も無い)

「どうした、ミナセ」

「うえっ?! い、いや、なんでも…無いです」

「何か悩んでいることが有るならいうといい。」

(今絶賛、貴女の事で悩んでるなんて言えない!!)

というところで結局誤魔化して

「えっと…部活どうしようかと思って…」

と言ってしまった

「部活……か、お前は運動が嫌い……ではないだろうか」

「はい、でもどの部活も肌には合わなくて……」

「そうだろうな、お前程の者なら当たり前だ」

「でも空を飛ぶのは純粋に好きです。FC関係無く」

「——お前……コーチになってみたらどうだ」

「……………はい？」

私は次の日から各務教諭と徹底的にFCのルールや、歴史、マナー、技術を頭に叩き込む事になった

「良いか、ミナセお前はFCの実力だけなら恐らく私とほぼ同じ場所に居る。それを忘れるな、だが決して驕るな、あくまでも私の領域は通過点だ。お前はもつと上に行けるのだからな」

「は、はいっ！」

座学だけでなく、実践も交えての各務教諭とのレッスン

因みにだが模擬試合は死ぬ気でいかないと平然と海面に叩き落とされる……………絶対私よりも各務教諭のが圧倒的に強いと思うんですけど…

何故海面に叩き落とされるのか聞いたところ

「そういう戦法をとってくるFC選手も良くいるんだ、特にラフプレーをする選手に多い、因みにだがこれは1歩間違えれば自分ごと海面に突っ込むから割と技術がいるんだ」

と説明を受けた上に、

「そしてミナセ、お前は自分のグラシユにすこし頼りすぎているな、1度市販のを買いに行くぞ」

「と言い、何故かあおぞらスポーツに任意同行させられ  
「これが良いな」

と、紅燕を買ってもらおう始末である……各務教諭……俺にいつになつたら払わせて貰えるんですか……?と聞いたところ

「無論、ミナセがコーチの資格を取れたらだ」

と返された……なんてこった!!しばらくは各務教諭にお世話になりっぱなしではないか!?

「あの……各務教諭、何故俺のグラシユを紅燕にしたんです?」

「ん……あー……そのグラシユは型が古い割に調整すれば性能が今のと遜色無いくらいだしな、その辺の調整の仕方を覚えてもらおうと思つてな、ああ、因みにだがバランスーカットはするなよ、バランスーカットははつきり言つて今はコーチが使う代物では無いからな」

「……今は?」

「気にするな、こちらの話だ、後は……」

「私と同じグラシユを履いて欲しかったんだ」

そう言う各務教諭は夕焼けに照らされ、茜色に染まって見えた

そして出す入部届

「さあ、私からお前に教えられることは全て教えた、さあやってこい！」

そう笑顔を浮かべ言う各務教諭

「ありがとうございます…各務教諭」

私は笑顔で答え、試験会場へと向かう

「そうだ、イエルネフェルト…私の下の名前は葵だ。覚えておくといい」

「え??え??」

なんでまた急に…各務教諭は下の名前を私に教えたんだ…

答案に回答をスラスラと埋めていく…と途中に…思わず目を止める問があった

問 7 アンジェリック・ヘイローを考案したFC選手の名前をフルネームで記述せよ

(これって…)

〃イエルネフェルト!!見せてやる!!これが私の現役時代最強にして最高の戦術…アンジェリック・ヘイローだ!!〃

〃なっ…!!?〃

強烈なスイーダに海面すれすれまで叩き落とされる

“でもっ……っ!!?”

各務教諭が自分の周りを円を描きながら高速で回転していた

“これが目的……っ!?”

“そうだ!!だが今の私はここからアンジェリック・ヘイローのひと  
つ先に行く!!”

“なん……っ!?”

次の瞬間凄まじい衝撃背中を襲う、理解した時には、各務教諭が背  
中をタツチし、点を取り、私は体制を崩したまま空に放り出される

“まだだっ!!”

“ぐっあ!?”

さらに加速し追いついてきた各務教諭が再び背中点を取る

そこで模擬戦終了のブザーが鳴った

ちよつとしたトラウマである……自分があれに対処できるよう  
なるまで耐久訓練とか鬼だった……

回避法その1

スイシーダを避ける

1番これが理想。できなかつたらほぼ終わる

回避法その2

アンジェリック・ヘイローから抜ける

これができるようになるまでが至難の業。正直オススメできない

---

回想終わり……この問の回答は

各務葵

答案とはいえ、各務教諭をフルネームで書くなんて中々無いことだな……

こうして試験に出る程の人が私の師なんて……自分は恵まれている……いや、恵まれすぎているかもしれないな

そんな事を頭の片隅に置きつつ、試験は恙無く終わり、公認指導員の資格を無事に取ることができた。

「各務教諭、ありがとうございますお陰様で無事に資格を取れました」

「そうか、それは良かった。まあ元よりお前が落ちるなど天と地がひっくり返っても有り得なかつたがな」

「流石にそれは言い過ぎなのでは……?」

「そうか?あながち間違いでは無いと思える位に指導したつもりだったんだが……私の指導では不安だったか?」



「いえー！そのようなことがあるはずもございません!!」

めっちゃ畏まる、それはもうパラガスの如く畏まる

「そうか…？本当か…？」

あっー!!反則です!!!各務教諭!!ちょっと不安げに目を潤ませてそんな風に言うなんて尊さでコジマ汚染されるレベルで反則ですう!!

「勿論!!各務教諭の指導の賜物ですよ!!」

「そうか…？ならよかった…」

んぎやわいい!!!安心した時のその笑顔最高です!!あー!!尊い…今ならアサルトアーマーされてもいい…いや、良くは無いか

「どうした、イエルネフェルト？顔が赤いぞ？」

「い、いえーだ、大丈夫でしゅー!」

か、噛んだー!!

「本当か…？熱が有るかもしれん…」

アツ…我が生涯に一片の悔い無し!!

結局各務教諭の顔を間近で見つめたお陰でオーバーヒートして倒れた…

各務教諭は鈍感系主人公なのか…？

「はう……やってしまった……」

あんな笑顔を私に向けて感謝されたら……

「勘違いしてしまうじゃないか……”ミナセ”……」